



Hazel MACKENZIE and Ben WINYARD eds.
Charles Dickens and the Mid-Victorian Press, 1850-1870
(xxiv+332 頁, Buckingham: The University of
Buckingham Press, 2013 年, 本体価格 £25.00)
ISBN: 9781908684202

(評) 榎本 洋
Hiroshi ENOMOTO

本書はバッキンガム大学で 2012 年の 3 月 28 日から 31 日まで開かれた “Charles Dickens and the Mid-Victorian Press, 1850-1870” という本書のタイトルにもなった学会での研究発表に基づく論集である。構成は四部で序文を書いた Drew によれば、一部は当時の雑誌業界の概観、二部は *Household Words* (*HW* と略)、*All the Year Round* (*AYR* と略) で扱われている時事問題、三部は雑誌執筆に関与した作家、ジャーナリストたち。そして、四部に雑誌編集者としてのディケンズの在り様が論じられる。雑誌を手掛かりにしてディケンズの作家活動を丹念に検討した、こうした論集が可能になったのも *Dickens Journals Online* というプロジェクトが起ち上げられたからである。文学テキストと非文学テキストを並置することで、思いもよらぬ生産的な論考が提供された。以下は主だった紹介である。

Shattock の論文は、ウェリントン街の *HW* の事務所が、*Examiner*, *Morning Post*, *Reynold's Miscellany* 等、商売敵の事務所と指呼の間にあったことが、ディケンズの雑誌編集者としての姿勢を表しているという。それが先行雑誌を意識すると同時に差異化を図ることになった。女性作家の登用、題材の多様性、体当り的なルポルタージュや当事者へのインタビュー記事などディケンズが斬新な企画で際立った存在感を主張するのに成功し、編集者ディケンズは後世のモデルにもなった。*AYR* も同様に、*Once a Week*, *Cornhill Magazine*, *Chamber's Journal* などを意識しつつ、フォントやデザイン、ニュースの排除、低価格、娯楽性と教訓性の二部構成、想像力の強調など、その衣鉢を受け次いだ。連続性を謳ったのもディケンズが、印刷技術の発達で齎した流行のイラスト付き雑誌との差異化に拘ったからである (*Brake*)。 *AYR* では小説家は、字数を月刊、週刊ともに意識して小説を書いたという指摘は大切だろう。 *Weekly issues* が月刊で再版されたという事実は見過ごされやすいからだ。ところで、ディケンズがイラストを忌避したのは *Chamber's Journal* に倣ったためでもあるが、流行のイラスト付きの雑誌には語

り口の多様性が欠けているとモーリー (Henry Morely) に述べたように、安易な印象が付きまとったからだ。例として Louis James はレノルヅ (G. W. M. Reynolds) が編集した *Miscellany* を挙げ、その煽情性と扇動的な政治性、中産階級への啓蒙性の欠如を指摘している。*Mysteries of London* はその好例である。Claes が論じたのは、*The Household Narrative of Current Events, Household Words Almanac* である。前者は 1850 年 3 月から 12 月に出た月刊別冊であり、後者は 56 年から 57 年の年鑑である。*HW* が時事性を排除するために、「年代記」と最初は銘打って 1850 年に出されたものの、ニュースを掲載しているため印紙税 (1855 年廃止) の対象になり、裁判沙汰になった。無罪になるものの印紙税を避けるディケンズの苦肉の策とわかる。クルイックシャンクで有名な *Comic Almanac* が伝統的な風習などを揶揄するために発行されたように、後者は *HW* の記事などに反対する論者を風刺するために出されたという。また季節の折りに触れて出る情報があったという。こう見ると 1850 年代の雑誌は如何にも多彩だ。Altick が指摘するように不特定多数の為の文学が単なる誇張ではなく、現実のものとして初めて実感されるようになったのが 1850 年代からである (Altick, 142)。更に 1852 年には貸本屋設立、スミス (W. H. Smith) の鉄道 book stall, *The English Domestic Magazine* の家庭雑誌の発刊が続き、読者層の多様化に拍車がかかる。

二部は *HW*, *AYR* が問題とした都市環境と衛生問題を論じている。都市の膨張が齎したものが、飲料水の供給、伝染病の予防、ごみの処理であり、60 年代まで主だった下水施設が不十分だったことを考えれば当然だろう。Foster の論文は 30, 40 年代に流行った救貧院論争が、60 年代後半に再燃した経緯としてディケンズが指示して書かせたパーキンソン (Parkinson) という人物の記事を取り上げる。この記事は、救貧院委員会を挑発することが半ば目的で、記事の書き方には語り手の恣意的な選択性などに世論の注意を引こうとする編者の戦略があるという。つまり、救貧院を訪問しその様子をルポするという、一見客観性を装いながら具体的な細部が意図的に省かれているため、空白は読者の想像力に委ねられる。Gay の論文は衛生改革を通してディケンズがそこにまず見たのがイギリスの島国根性である。パリの屠殺場と市場に換気設備が備えられていること、南仏のアミアンの飲料水の清潔さに言及し、折に触れイギリスの現状と対比する。そして、都市の有機的なメタファー表現が生理的機能として新たな都市の身体的な表現を生み出したと指摘する。自然描写が、聖書的表現と同時代の環境の問題を接続した「環境への詩的正義」を可能にしたという。都市の衛生、清潔感への関心はチャドウィックの報告書 (1842) により齎されたものだが、フランスとの比較を言うなら労働者の住宅問題も触れるべきだろう。ナポレオン 3 世が権力を掌握したとき公約として労働者への住宅供給を挙げ、エンゲルスも労働者の住宅を論じ

ているからだ (1870). 更に、「象徴的な都市の身体」が十全に用いられるのはバジヨットの *Physics and Politics* (1879) という、生物学、ダーウィニズムに添った社会理解を大幅に促した書物においてであり、記事のレトリックもその文脈で見るべきだろう。Horrocks の論文は、ディケンズが主張する衛生改革が、不干渉の原理との戦いを余儀なくされながら、体制側の意向をくむ形で進められたことを示している。1851年6月に発表された“On Duty with Inspector Field”の表題が示す通り、出版メディアが都市の環境・衛生面の視察官、啓蒙家、そして余興者の三位一体の役割を果たすことで1855年の都市運営法の導入や、半ば強制的な *Medical Officers of Health* の任命という制度を可能にしたという。こうした一連の衛生改革の最中で *HW* は発言力と責任を増し公的な観察者として重きをなしたという。こう記すと何やら抑圧的でフーコー・ファンが狂喜しそうな規律権力を示す専制的な出版メディアと誤解しそうになるが、*HW* の場合、それを免れているのは事実と空想の親和関係にある。とはいえ、この空想的要因に関しては、詳述されておらず検討の余地はある。いずれにせよ、フーコー的な権力とメディアの関係を考える上では刺激的な論考だろう。だが、この程度なら要田圭治氏が鋭く論じている。権力とメディアの関係は、次の *Tulloch* の論文がより刺激的である。犯罪報道のことを考慮すれば、権力との共生関係はある程度、織り込み済みだろう。初期の犯罪報道でディケンズと彼のメディアの果たした役割は際立っている。ディケンズが犯罪報道で大きな役割を果たしたころは、警察機構も旧型から新しい組織へと脱皮しつつあった頃と重なる。ディケンズが *Old Bow-Street* に軽蔑を隠さず、泥棒逮捕のためにロンドンの街中をうろつく事もあり、また、万能のスコットランド・ヤード警察の神話創成に一役買ったという。いずれにせよ、メディアと権力の共犯関係は、一方では法と社会秩序の構築に割かれ、他方、警察組織への信頼と理想化を生み出したのである。*Lewis-Bill* の論文は、1851年の万国博覧会以降に書かれた中国を題材にした記事を取り上げる。ここでもナショナリズム (イングリッシュネス) が問題となる。阿片戦争以降の中国の後進性をどう正当化し、そのイメージの拡散に努めたかを探っている。万博で出品された中国製品は東インド会社の選定によるもので、一見、中国の無作為、停滞を象徴しているようだが、他方ではその潜在力を恐れ支配しているとも解釈できるという。こうした不安感自由貿易によりもたらされたもので、ディケンズが示す資料も帝国に都合よく中国の人口を無視した資料が多く、ここに中国を警戒するような傾向もあるという。以上で扱われるのは都市の衛生、メディアと権力、ナショナリズムの問題である。

三部はディケンズと周辺の作家、その力関係の在り方を論じている。雑誌の商品化が作家の地位、および作家の公的な想像力の変容にいかに関わったかを論じ

ているのが Mckenzie である。ディケンズと編集者モーリーの記事から、HW がどの作家にも読者への奉仕、社会的責任感と作家の芸術的個性という、相反する要求を突き付けたため、矛盾する役割に苦慮させられていたという。コリンズが 1858 年に発表した“The Unknown Public”は肥大化する一般読者を何とか明確にしようとする試みであり、増大する読者層にどう対応するかが作家の課題となった。Schelstraete の論文はノン・フィクション作家の扱いについて論じている。1860 年代にフィクション、小説の作家に署名が許されたのとは対照的に、ノン・フィクションの作家には署名は許されなかった。これは雑誌が野心的な中産下級の読者を開発して、有益な情報を満載したノン・フィクションを提供したかったというディケンズの意図だという。ディケンズ編集の許で、作家たちは「使用価値」を上回る「交換価値」を得たのだ。以下はマーティノウ、癖のある編集者ウィルズ、モーリー、サラ等がどのような「交換価値」を得たかを論じているが、ここでは省略する。

次は雑誌とディケンズの間関係を幅広く扱う。Flanders は、ディケンズ文学が *Illustrated London Magazine* あたりから想を得たとして、『荒涼館』のジョー、トム・オール・アローンズなどを挙げ、また『クリスマス・キャロル』、『鐘の精』も都市の貧困問題を扱ったトラクトと読めると言う。次の Furneaux は、“The Seven Poor Travelers”という HW のクリスマス号に掲載された小品で（『クリスマス・ストーリーズ』に掲載）、従来の男性的なそれとは少し異なる繊細な主人公を据え、読者に対し戦争への一体感を呼掛ける。他方こうした人物の設定は組織の非合理性、非効率性の批判にもなっている。次の Schlicke の論文は一番重要だ。ディケンズの『ボズのスケッチ』の“editorial we”が、雑誌では単称一人称の中間体になり、カメラ・アイのように融通無碍な存在になり、それが同情的な性質であると指摘する。ボズの語り手はこうして「進化する」が、匿名性を増すと風刺的になり、『リトル・ドリット』の批判でディケンズはその欠点を痛感する。また、“we”は一人称単数の代用的な面もあるが、全知とは限らず“elusive”な存在だと言う。印象的なのは、時系列で詳細にディケンズの創作を辿る一方、ノン・フィクションとフィクションの区別なく考察していることだ。融通無碍な語り手は『非商の旅人』も同様で、よく自伝性が喧伝されるが、語り手は一般人が立ち入らぬところに分け入り、見聞した事跡の類別化・タブロー化を意識するという公共性も見られる (Patten)。1851 年から 53 年に掲載された『子どものための英国史』では反宗教改革が批判され、アルフレッド大王とエリザベス時代が称えられる。HW がイデオロギー・プログラムを具現化したように、背後にはカソリックの不寛容と反進歩的なディズレイリーの中世主義への反発がある。この作者の歴史記述は読者に正統的な歴史を啓蒙し、イギリス人としての矜持を示すこ

とである。また、アメリカとフランス第二帝政への嫌悪感がある (Paroissien)。

駆け足で論文を概説した。多彩な論文を読むのは骨の折れることで、読み違いがあるかもしれない。それはともかく、個々のテキストを読むときも *HW. AYR* 等の雑誌を絶えず手元に置き、参照しながら取り組むことの意義が示された。文学テキストと非文学テキストは相互に作用し、テキストには重層的な歴史性が備わっていることが示唆される (その逆も)。Slater は序文で House の *The Dickens World* を先駆的研究として評価するが、これに Engel の *The Maturity of Dickens* の一部を加えてもいいだろう。ディケンズとメディアという問題は、今や出版社との金銭的なやり取り、作家の社会的地位など地味な分野から、テキストの歴史性、歴史のテキスト性という新歴史主義的な問題意識へと広がった。それを示しているのがこの論集である。

参考文献

Altick, Richard, *Writers, Readers and Occasions*. Ohio State University, 1989.

榎本 洋 「「意識産業」の不安：The English Domestic Magazine の場合」(松本三枝子編『イギリス女性雑誌研究：19世紀後半から20世紀初頭まで』(愛知県立大学研究成果報告書, 2007)

要田圭治 『ヴィクトリア朝の生権力と都市』(2009, 鶴見書店)